北海道遺産協議会について

北海道遺産協議会は、北海道遺産の誕生を前に、第一回選定と同年の平成13年5月に『北海道遺産構想推進協議会』として発足しました。

北海道遺産構想の生みの親である、北海道庁若手職員のプロジェクト『北の世界遺産推進方策検討プロジェクトチーム』が、文化財関係者はもちろん、経済や観光、地域づくりの専門家や民間企業の人々に厳しくも温かいアドバイスをいただき、民間組織が北海道遺産を推進することが、未来の北海道づくりに役立つとの提案をして設立されました。

それから20年。北海道遺産地域の皆さんと共に、事務局も世代交代しながら活動を続けています。

北海道遺産の魅力

北海道遺産は、自然や文化、史跡、産業遺産、食など様々な分野にわたっています。そのどれもが「北海道らしさ」の魅力を持っているものですが、世界や日本全体との繋がりが興味深いものばかりでもあります。

地名の手がかりを知ることができる「アイヌ語地名」は、北海道の自然や、人々の生活と土地とのつながりに由来があり、地名から風景がみえるように感じられ、また、周辺の世界の人々との言葉の繋がりも学びたくなります。

「内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群」は、恵まれた地形と自然を背景に、日本の中でも長く縄文文化が続きましたが、その暮らしぶりや精神文化など、他地域との違いや関連が興味深いです。

一方で、遺産や文化財と言われるものは、古くさいもの、詳しい人だけが語ってよいもの、というような難しさを感じる人もいるのではないでしょうか。

私もこの仕事に就くまでは全くの門外漢でした。ただ、古いものに興味があって足を運び、地域の人々の話を聞くのが楽しくて関わり続けてきたように思います。

例えば、「森林鉄道蒸気機関車『雨宮21号』」が蒸気をあげて走る姿をキラキラした目で見つめる人。学芸員ではないからと戸惑いながらも地震で倒れた史料や濡れた文献を守る方法を考える人。カッパ姿で看板を支え、旧炭鉱施設のアート会場に人々を迎えていた長靴が似合い大きな声でいつも笑っていた人。

北海道遺産は、文化財だけでなく、それを保全活用し、未来につないでいく人が地域にいることでもあると思っています。

【現事務局メンバー・左が筆者（事務局矢野）】
これまで事務局に関わってきた人々が、地域とのつながりをつくってきてくれました。事務局の財産である、北海道遺産人（担い手）たちとのネットワークをこれからも繋いでいきたいです。

NPO法人 北海道遺産協議会の取組

北海道遺産協議会では、北海道遺産の選定のほか、各地の北海道遺産の普及・啓発、地域が行う保全・活用の取組への支援など、様々な事業を行っています。ここでは令和4年度に実施した事業の一部を紹介します。

▲食で伝えるプロジェクト

▲北海道ヘリテージウィーク

食で伝えるプロジェクト

身近な「食」をキーワードに新たな角度から魅力を伝えていく取組として、北海道遺産にまつわる様々な「食」のストーリーをSNSなどで発信しています。今年度は各地域で活動されている担い手の皆さんにもご協力いただき、イオンモール札幌発寒にてパネル展を開催しました。

北海道遺産フォトコンテスト

各地の北海道遺産に足を運んでもらうきっかけづくりとして実施しています。今年度は「あなたが伝えたい北海道遺産」をテーマに、グランプリ1点、準グランプリ2点（1ページ参照）、入選作品15点が選ばれました。

北海道ヘリテージウィーク

札幌駅前通地下歩行空間を会場に、北海道遺産パネルのほか、北海道遺産フォトコンテストの入賞作品や助成活動紹介パネルなどを展示。遺産地域のパンフレット等の配布や、パネルを巡るクイズやアンケートなども行っています。

寄附金による助成活動支援

北海道遺産協議会に寄せられた寄附金は、北海道遺産の活用・保全にかかわる活動に役立てています。

今年度の助成活動として、「ほっかいどう遺産WAON」による寄附金からは、北海幹線用水路の景観保全と環境整備の活動や天塩川流域の移動史探訪事業、道南ご当地カックー制作と子どもたちへの縄文文化普及啓発事業など、北海道遺産の保全に取り組む20件の地域活動に助成を行いました。

また、お～いお茶『お茶で北海道を美しく。』キャンペーンによる寄附金からは、昭和新山の環境保全登山学習事業や野付半島の外来種駆除活動など環境保全に係る3件の助成活動に活用されています。静内二十間道路の桜並木の植樹では、ボランティアの皆さんに見守られながら桜の植樹式を行いました。

これからも地域や担い手の皆さんの活動の活性化につながるよう、様々な取組の支援を続けていきたいと思います。

▲令和４年度 助成活動の様子

「ほっかいどう遺産WAON」について

イオン株式会社と北海道の包括連携協定に基づき、平成23年7月より「ほっかいどう遺産 WAON」が発行されました。カードを使用して決済した金額の一部が北海道遺産協議会に寄附されます。寄附金は北海道遺産の保全活動等の地域活動に助成しているほか、北海道遺産の普及・啓発活動に活用しています。

お～いお茶『お茶で北海道を美しく。』キャンペーンについて

株式会社伊藤園のお～いお茶『お茶で北海道を美しく。』キャンペーンは、期間中の「お～いお茶」全飲料製品の売上の一部が北海道遺産協議会に寄附される活動で、平成22年度よりスタート。北海道遺産に選定されている貴重な自然環境や景観の保全活動に助成を行っています。

子育て世代交流施設「from☆Moko」

「Moseushi Kodomo」の頭文字をつなげて『Moko』
妹背牛町の子ども達がここから成長していって欲しいという願いが込められています。

妹背牛町

みんなでつくる親子の交流拠点 from☆Moko

北海道で3番目に小さな山のないまち「妹背牛町」は、北海道の母なる川「石狩川」が流れ、美味しいお米をつくるのに適した肥沃な大地が広がっています。

この小さなまちだからこそ、住んでいる町民同士がつながり、交流できる場所が必要です。

今回は、地域みんなでつくる子育て世代交流施設「from☆Moko」を紹介します。

暮らしたい、暮らし続けたいまちづくり

少子高齢化が進む妹背牛町では、全ての世代がともに協力し、町民同士がつながりを持てる暮らし続けたいまちづくりを推進するとともに、「移住・定住対策」を推進する各施策を展開しています。

子育て環境の充実や子育て世代との交流促進を図る上で、親子の交流拠点である「from☆Moko」（フロム・モコ）の存在は欠かせません。

モコを利用するお母さんの9割以上が町外から移り住んだ人たちです。建物の設計から携わり、移住者の要望がギュッと詰まったモコは、親子の笑顔が広がる和やかな雰囲気。町での生活や育児の悩みを気兼ねなく相談できる場所としても重宝されています。

子育て世代の活力を地域に広めるモコの役割は、移住のきっかけを後押しし、人口減少対策を進める上でも重要です。古民家を改修したモコの事例は、点在する空き家を地域資源ととらえて新たな価値を創り出し、「暮らしたい、暮らし続けたい」まちづくりへの大きな一歩となりました。

みんなで協力してつくる

施設を整備するにあたり、まずは実際に施設を利用する子育て世代の要望の取りまとめから始まりました。

就学前の乳幼児がいる全世帯へアンケート調査の実施、町内の子育てサークルにも意見・要望を聞き取り、必要な遊具など施設内の改修内容についてまとめました。

施設の場所についても、子育てサークルのメンバーと候補地の空き家3カ所を実際に回り、建物の状況や近隣の環境などを確認して選定しました。

こうして、子育て世代の要望を全て取り入れた仕様書を作成。改修業者については、作成した仕様書を基に企画提案をしていただくプロポーザル方式により選定しています。

施設に愛着を持ってもらおうと、内壁にしっくいを塗るワークショップを開催。15組の親子が参加し、施設の整備内容の検討から建設作業まで、全て子育て世代が携わっています。

また、屋外遊具を備える裏庭の整地作業は、地元の建設業協会がボランティアで実施しました。

皆の声を取り入れた施設

施設は、「体を使った遊び」、「保護者の交流・いやしの場」がコンセプトとなっており、中2階の吹き抜け部分に張り付けられたハンモックネットや2階に昇れるボルダリングなど、子どもが楽しめる設備はもちろん、子どもたちが見える場所にあるカフェスペースや外遊びの後に手足を洗えるよう玄関に設置された洗い場など、お母さんならではのアイデアが詰まっています。

また、業者からは「赤ちゃんも利用するため、施設全体の水道水を浄化する設備」、「災害時にも発電機と接続し、避難場所として利用できる改修」などの追加提案があり、安全面でも安心です。

▶ハンモックネット

▲ボルダリング

◀玄関に設置された洗い場

施設での活動

開設日には自由に親子が集まり、子どもたちは施設内や屋外遊具で自由に遊び、それを見守る保護者たちの交流の場となっています。

また、定期的にイベントも開催しており、「クリスマス会」や「冬休み工作教室」など子どもが対象のイベントはもちろん、「骨盤教室」や「マタニティのつどい」など、妊婦・保護者向けのイベントも行っています。

施設は、30代から70代の子育て経験がある女性スタッフが自身の経験を生かしながら運営にあたっており、色々な特技を持っているスタッフが講師となってお母さんに編み物を教えたり、子どもたちに工作を指導したり、イベントでお菓子を手作りして参加者に振る舞うなど、利用者とスタッフの交流も積極的に行われています。

▲お母さんの日頃の疲れをいやすためのハンドマッサージ

▲クリスマス会の準備

施設の効果

町の課題であった空き家を活用して整備したことにより、新築に比べて費用を4割抑えることができました。

また、モコの整備後、町で実施している中古住宅購入支援事業の活用が少しずつ増えています。これは、町が率先し空き家の活用を行ったことにより注目が集まり、空き家の解消につながったものと考えます。

不要な空き家を子育て世代の交流拠点に改修した施設は、子どもたちはもちろん、母親同士の交流も深めることができるため、町民が主体となって運営を進めています。

近年、子育て世代の移住が増えていますが、地域への開放を目指すこの施設をきっかけに関係人口の増加も期待されます。

子どもだけではなく、お母さんの交流の場ともなっています。▶

◀広々としたアイランドキッチンではみんなで料理を楽しめます。

今後の展開

現在も、屋外の広場にいくつかの遊具を設置していますが、来年度は企業版ふるさと納税で寄附を募り、さらに子どもたちが楽しめる遊具を設置したり、土の上でより安全に遊べるよう芝を張りたいと考えています。

また、現在は子どもだけでの利用は認めていませんが、いずれは児童会館的な機能も持たせて、さらなる子育て・教育環境の充実を図り、移住施策にもつなげていきたいです。

回覧板などで施設の紹介はしていますが、さらに子育て世帯以外にも関心を持ってもらう必要があります。施設利用者からは「高齢者から昔の遊びを教えてもらうイベントを開催してほしい」、「定年後で時間に余裕がある方たちに勉強を教えてもらいたい」などの、三世代交流を求める声もあがっていることから、一般町民も参加できるようなイベントを企画し、色々な世代の方が関わり、つながりを広げ、町全体で子育てをしていけるような仕組みづくりをしていきたいです。

▲走り回れる広大なグラウンド

▲屋外に設置されている遊具

本記事の内容は、妹背牛町健康福祉課で担当しております。
〇事業に関するお問い合わせ先　TEL:0164-32-2412